



Title	日语母语者汉语单双音节同义词习得研究
Author(s)	魯, 思含
Citation	大阪大学, 2023, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/92235
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏 名 (魯 思 含)

論文題名

日語母語者漢語単双音節同義詞習得研究
 (日本語母語話者を対象とした中国語単双音節類義語における習得研究)

論文内容の要旨

中国語単双音節類義語は現代中国語における文法的な特徴の一つである。しかしながら、国際中国語教育では音節数が同じ類義語を重視する傾向があり、音節数が異なる単双音節類義語に関する説明は不十分だと考えられる。その結果、中国語学習者は類義関係を持つ単音節と二音節の差異を認識できず、不自然な中国語を使用する学習者が多く見受けられる。その中でも、日本語母語話者においてはこの問題がより顕著であるということが先行研究で明らかとなっている。これは日中両国の言語が漢字を表記符号にしており、同形語が多いことが原因だと考えられる。しかし、中日語彙の対照研究では二字同形語を中心としており、日本語の「単双字類義語」や日中「単双音節類義語」の対照研究を行う研究者は非常に少ない。これらのことから、日本語を母語とし、中国語を外国語とする学習者の中国語単双音節類義語における習得実態を明らかにすることは非常に価値があると考えられる。本研究では先行研究に基づき、本研究では主に以下の3点の研究課題として挙げる。

- (1) 中国語単双音節類義語の習得における日本人学習者の誤用の特徴とその原因は何か。
- (2) 中国語単双音節類義語を習得する際に、形態素の性格が日本人学習者へどのような影響を与えるのか。そして、どのような習得過程があるのか。
- (3) 中国語単双音節類義語の習得をする際に、文脈の文体が日本人学習者にどのような影響を与えるのか。そして、どのような習得過程があるのか。

本研究では、日本語母語話者を対象とし、対照分析を通じて単双字同義語における日中言語の異同を明らかにする。その上で、言語習得理論と認知学習理論である有標理論に基づき、学習者の習得状況を中心とした誤用分析と仮説検証の調査を行う。調査結果をもとに日本人学習者の中国語単双音節類義語習得における各段階の特徴と問題点を明らかにし、中国語教育の側面から、日本人学習者を対象とした単双音節類義語の教授法を提言する。

本論は全部で8章から構成されている。以下では各章の概要をまとめた。

第1章「緒論」では4つの内容が含まれている。まず初めに、本研究が中国語を習得する日本語母語話者を考察対象とする必要性を明らかにした。そして、研究範囲を明確にするため、類義語の概念を定義し、さらに中国語単双音節類義語の定義とその基準を説明した。また、中国語単双音節類義語に類義する術語を整理し、本論に使う術語を明白にした。そのうえで、中国語単双音節類義語における習得研究を行う研究意義とその価値を説明し、本章の最後では、本稿全体の構成を示した。

第2章「中国語単双音節類義語の習得研究」では、中国語単双音節類義語習得をめぐる先行研究を大きく2つの視点からまとめた。第一に、中国語単双音節類義語の習得状況を考察できる要因を見つけるため、類義語習得のメカニズムに関連する研究をまとめたうえで、字形の類似性、中国語と学習者の母語の間における類似点及び相違点（特に、形態素の性格、文体の種類）が語彙の習得に影響をもたらすことが明らかとなった。本研究では、これらの先行研究を実験方法と影響因子を特定する際の根拠とした。第二に、中国語単双音節類義語習得に関連する先行研究をまとめたうえで、単一母語話者を対象とした研究と中国語単双音節類義語の実証研究は、いずれも検討をする余地があることが明らかとなった。

第3章では、対照研究の方法を通じて、中国語と日本語における単双字類義語の特徴を検討した。本研究は単双字類義語の名詞と動詞を代表的な品詞とし、言語事実と先行研究を踏まえて、中国語と日本語の単双字類義語における数量分布、語彙論、統語論、意味論、形態論など、各側面からその特徴を考察した。考察の結果に基づき、単双字類義語における中国語と日本語の類似点及び相違点をまとめた。形態論から見ると、形態素の自由度と生産性には違いがあり、文体論及び音韻論では、文体と対応する音韻表現はある程度の違いがあることが明らかとなった。中国語には二音節化の傾向があるため、文体差による音節数の違いが存在する。一方、文体と音韻の対応関係を日本語に活用する場合、一定の制限や条件をつけなければならない。すなわち、この対応関係は音韻（音節数）ではなく、漢字の数で見なければならないということである。

第4章では、日本語母語話者を対象として、中国語単双音節類義語の誤用について検討した。本章では、「HSK動態作文コーパス」を考察範囲として、二音節の名詞を単音節の名詞として誤用した例をまとめ、その特徴を考察した。誤用された原因は(1)文体差と対応する音韻表現の差異(2)中国語と日本語の同形形態素の自由度の違い(3)慣習的な共起関係の違い(4)構文規則の違い(5)造語法の違い(6)意味範囲の違い(7)コミュニケーション・ストラテジーの影響という7つに分類することができる。数量分布から見ると、形態素の性格では、拘束形態素が含まれる字、単双音節類義語よりも、自由形態素が含まれる単双音節類義語のほうが誤用の割合が高く。また、中日同形形態素が日本語で「訓読」であるほうが誤用される割合が高いことが明らかとなった。これらの結果をもとに、本稿では誤用の数量と出題語の難易度及び日中形態素の字形の類似度の関係性を検証した。その結果、誤用の数量分布は出題語の難易度と字形の類似度に関わることがわかった。具体的には、出題語の難易度や字形の類似度が高いほうが誤用数は多いことが明らかとなった。

第5章では、形態素の性格が中国語単双音節類義語の習得に与える影響について考察した。本研究では、第3章と第4章の結果をもとに、第二言語習得理論と有標理論を併用し、形態素の性格が日本人学習者の中国語単双音節類義語の習得に与える影響に関する量的研究を行った。仮説要因として被験者内要因を形態素の性格(自由形態素と拘束形態素)、被験者間要因を中国語のレベル(中級レベルと上級レベル)とし、合計25名の日本語母語話者を対象に調査を実施した。その結果、(1)中国語単双音節類義語の成績は学習者の中国語のレベルに関わることが明らかとなった。(2)中国語単双音節類義語の習得において、拘束形態素が含まれる単双音節類義語は自由形態素が含まれたほうより成績が良いことがわかった(3)中国語単双音節類義語の習得において、自由形態素と拘束形態素の成績に有意差はあるが、この差は日本人学習者の中国語レベル向上による改善はしていなかったことが判明した。これらの結果を踏まえ、本研究では母語とする日本語の影響を考察するため、さらに日本語母語話者を対象とした中日同義の文脈における一字漢字語と二字漢字語の使用傾向をリッカート尺度を用いて調査した。日本人学習者の母語である日本語の使用傾向を考慮し、本実験の結果を分析したところ、以下のような結果となった。

(1) 拘束形態素が含まれている中国語単双音節類義語では、学習者は中国語のレベルが上がるにつれ、母語である日本語からの影響が薄れる傾向にあることが示された。(2) 拘束形態素が含まれている中国語単双音節類義語では、中級レベルの学習者は単音節を誤って使用する傾向があり、上級レベルの学習者は単音節と二音節の同義語の区別を分別できず、「どちらでもいい」という認識を持っている学習者が多いことが明らかとなった。

第6章では、「文体論に分類される文脈の種類」という要因に着目した実証研究を行った。これまでの研究では、ほとんどが中国語単双音節類義語の性格を要因とした習得への影響に焦点が当てられており、「文体論に分類される文脈の種類」の役割に対しては、あまり言及されてこなかった。本章では、被験者間要因を中国語レベル(中国語の学習歴を一年・二年・三年・四年に分類)、被験者内要因1を文体の種類(フォーマル、・インフォーマル)、被験者内要因2を文体-音節対応関係(典型・非典型)とする3要因での実験を行った。この実験では、被験者の習得状況が仮説要因による影響を受けることを確認し、データを統計したうえで分析を行った。分析結果は次の通りである。(1)日本人学習者の中国語のレベルが単双音節類義語の習得状況に影響を与える、特に一年次から二年次の段階では、その影響が著しいと明らかとなった。(2)文体差が単双音節類義語の習得状況に影響を与える。フォーマルな文脈より、インフォーマルな文脈の成績が高い。(3)インフォーマルな文脈では、典型的な文体-音韻の対応関係を過剰使用していない。(4)フォーマルな文脈では、典型的な文体-音韻の対応関係を過剰使用可能性がある。二音節(合偶詞)は単音節(嵌偶詞)よりも習得状況が良好であるといえる。(5)文脈における文体差と文体-音韻対応関係に影響を与えられている単双音節類義語の習得状況は学習者の中国語のレベルに関わることを明確した。

第7章では、「新三教問題」の理念に基づき、日本における中国語教育への提言を行った。まず、総合的な教育観を確立し、中国語学習の段階に応じて、日本語母語話者に有効な教育法を採用することである。初級レベルでは単語に基づいた教授法を採用し、上級レベルでは、単語と形態素の両方に基づいた教育法を組み合わせ、統合的にアプローチをする必要がある。第二に、中国語の文体と音韻の対応関係を学習者が意識できるよう訓練することである。この方法を採用することで、実践的な現場を想定した「中国語+」の教育法で教えることが可能となる。最後に、異言語間差異に有標かどうかによって、適切な順序で中国語を教えることである。

第8章「結論」では第3章から第7章における考察をまとめた。また、本研究の不足点及び今後の課題を論じる。その上で、分析方法や影響要因の検討など、本論文の不足を振り返り、今後の研究課題として中国語単双音節類義語の統語的特徴や文体差を表現する「体原子」などについても習得研究の視点から実証研究を行うことができることを指摘した。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (魯 思 含)		
	(職)	氏 名
論文審査担当者	主 査	教 授
	副 査	准教授
	副 査	准教授
	副 査	教 授
	副 査	特任准教授
		古川 裕
		中田聡美
		鈴木慎吾
		林 初梅
		張 恒悦

論文審査の結果の要旨

『日語母語者汉语単双音節同義詞習得研究』（日本語母語話者を対象とした中国語単双音節類義語における習得研究）と題する本論文は、現代中国語において一定数存在している単音節（一音節）と双音節（二音節）の二つの形式を持つ同義類義語を取り上げて、これらの語に関する日本人学習者の習得に関する諸問題を論じたものである。

本論文の問題意識は（1）単双音節類義語の習得における日本人学習者の誤用の特徴とその原因は何か、（2）単双音節類義語を習得する際に形態素の素性がどのような影響を与えるのか、（3）単双音節類義語の習得をする際に書面語或いは口語、フォーマル或いはインフォーマルといった文体がどのような影響を与えるのか、という三点にあり、以下のような八章立ての構成によって論を展開している。

第一章では、本論文の考察対象が日本人中国語学習者であること、単双音節類義語の定義と範囲、研究の目的と意義、論文全体の構成を示している。

第二章では、このテーマに関する先行研究を幅広く紹介し、これらの先行研究が十分に扱っていない単一母語話者、特に日本語母語話者を対象とした実証的な研究を行うことの価値を述べている。

第三章では、中国語と日本語の単双音節類義語の数量分布、意味的特徴、形態的特徴などについて、対照研究を行っている。

第四章では、「HSK動態作文コーパス」に収める日本人中国語学習者の誤用例を考察範囲として、誤用の原因を以下の七つに分類している：（1）文体差と対応する音韻表現の差異（2）中国語と日本語の同形形態素の自由度の違い（3）共起関係（4）構文規則（5）造語法（6）意味範囲（7）コミュニケーション・ストラテジーの影響。

第五章では、前二章の結果をもとに、第二言語習得理論と有標理論を併用して形態素の素性（自由形態素か拘束形態素のいずれか）が日本人学習者の中国語単双音節類義語の習得に与える影響に関する量的研究調べるために25名の被験者に対する調査を行っている。

第六章では、被験者を中国語学習歴によって分類し、文体の種類（フォーマル、インフォーマル）、文体-音節対応関係（典型・非典型）に拠る習得状況の実験調査を行っている。

第七章では、単双音節類義語の習得実験を振り返って、日本における日本語母語話者に対する中国語教育について初級レベルでは単語に基づいた教授法を採用し、上級レベルでは単語と形態素の両方に基いた教育法を組み合わせる教育法を提言している。

第八章は本論文のまとめとして各章の結論を述べ、本研究の限界により残された問題と今後の展開を述べている。

上述のように、本論文は日本人に対する中国語教育の現場で頻出する誤用例を出発点として、単音節語と双音節語の比較を通じて、日本人学習者の習得状況を実証的に分析しようとした論文である。用語の不統一、明確性に欠ける記述など未熟な部分も多いが、三つの問題意識を漏れなく論じた点は評価できる。

これらを総合的に判断し、本審査委員会は本論文が博士（言語文化学）学位を得るにふさわしい論文であると判断した。